

1 安寿と厨子王

宮津市

母とともに父を探す旅に出た安寿と厨子王は、途中人買いのため母と別れ別れにされ、二人は「さんせう太夫」の所でさまざまな仕事をさせられて、苦労したあげくに安寿は死に、厨子王はそこを脱出して都に上って出世を遂げ、母と再会して、「さんせう太夫」たちに復讐をとげるといふ話はあまりにも有名です。この話は、丹後国の金焼地蔵の本源（元の姿）を説くという形で、少なくとも天正十年（一五八二年）以前から語られていた説経「さんせう太夫」がもとになり、その後いろいろ潤色されていまに至っているのです。

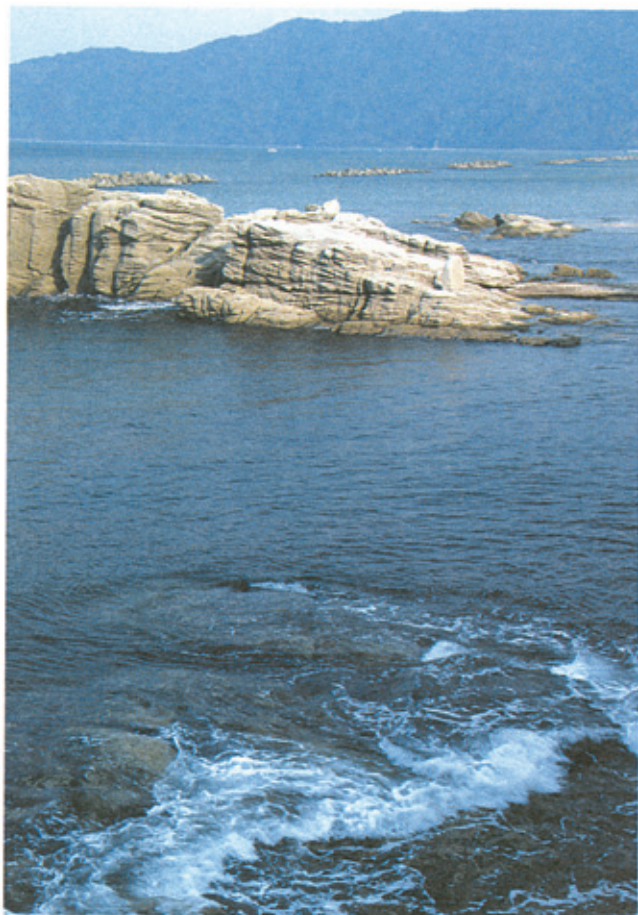
この話の元となったといわれる金焼地蔵（地元では身代わり地蔵とも呼ぶ）は、宮津市由良にある如意寺に所在しています。如意寺は山号を由良山という真言宗の寺で、隣にある由良神社とは深い関係のあった寺ですが、寺の境内には「さんせう太夫」の首塚があり、また付近には太夫の屋敷跡、首ひきの松、安寿潮汲みの浜など、いくつかの物語に関連する伝承地があります。

ところでこの物語の題名は、なぜ「さんせう太夫」なのでしょう。つか。「さんせう太夫」については、江戸時代には「三莊太夫」「山莊太夫」など、いろいろな字が当てられているのですが、大正四年（一九一五年）この話をもとに小説を発表した森鷗外は、

ご承知のように「山椒太夫」としました。しかし鷗外は、題名がなぜ「さんせう太夫」なのか、というところまでは、言及していません。

これについては、この話を広めたのは被差別民である散所で、それがいつしか物語の名称になったという説、あるいは「さんせう太夫」こそが散所を統括する散所の長者であったとする説などがあります。話の語り手が散所なのか、話の一方の主人公が散所なのか、の違いがありますが、室町時代の代表的な被差別民である散所が、なんらかの形で「さんせう太夫」成立に影響を与えていたとする点では、共通の認識となっているといえると思います。対して地元では、「さんせう太夫」を開発長者とする伝承などが、残っています。由良地方が古くから港として栄え、製塩も行なわれていたことが、こうした伝承が生まれる背景となっている、といっているでしょう。（川嶋將生）

農業以外の雑業、商工業、芸能などの仕事が差別される時代の居住地と住民を散所と呼びました。安寿と厨子王が受けたせいかんの傷をお地蔵さまが身代わりに受け、二人はもとのきれいな姿になったという説経語りがずっと生きてきたのは、子のしあわせを祈る親の痛切なおもいがこめられているからでしょう。



宮津市由良海岸

メモ●宮津市由良へは、北近畿タンゴ鉄道「丹後由良」駅下車。如意寺、由良神社境内拝観無料。参考文献に室木弥太郎校注『説経集』（新潮日本古典集成、新潮社）、岩崎武夫『さんせう太夫考』『続さんせう太夫考』（平凡社選書、平凡社）があり、森鷗外の「山椒大夫」は岩波文庫や新潮文庫などに入っています。